

[社 会]

# 歴史認識の深まりを保障する中学校社会科授業の展開

— 地域を視点に体験，探究を核とした原始学習の実践を通して —

柳澤 一輝\*

## 1 問題の所在

2012年度から中学校において新学習指導要領が全面实施となる。Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査報告書」によると<sup>1)</sup>、「新学習指導要領の内容への不安」に対して、(図1)のような結果が報告された。半数の中学校教師が、「探究的な学習」(以下、探究と記す)や「体験活動」(以下、体験と記す)について、不安を抱えていることが分かる。この探究や体験というキーワードは、社会科教育学研究の知見から見ると、とりわけ、目新しいものではない。むしろ、社会認識を通して公民的資質の基礎を養う社会科教育の基本的な性格と深く結び付く視点であると考えられる。しかし、こういった調査で、探究や体験が不安要素として上位に挙がるということは、換言すれば、各教科において、体験や探究といった活動が、十分に組み込まれてこなかったことに他ならない。

中学校社会科を見ると、とりわけ、歴史学習を苦手とし、関心を示さない生徒は多い。こういった生徒は、その理由を、「覚えることが多い」や「学ぶ意義が分からない」と異口同音に述べる。中村(1995)は、「日本人は非常に歴史を好む民族であるにもかかわらず、学校における歴史教育は暗記物とされて生徒の興味をひきつけないのはどうしてか」と問題提起し、その原因を、「大学入試の在り方や、学歴社会日本の問題だけでなく、教科書の作り方や内容の問題でもある<sup>2)</sup>」と帰結している。生徒は、「歴史は教科書の中にあるもので、歴史を知ることは年号や為政者など、歴史上の有名な人物の業績を覚えることであり、受験のために勉強するものだ」と捉えている。このような意識が生徒にある以上、学ぶ意義を見出すことはなく、正しい歴史認識には至らない。

本来、歴史は、自分を始めとする一人ひとりの人間の歩みの集積により作り出されるものである。民衆の歩みが大きな歴史を作り出し、自分が生きることで、それ自身が歴史を作り出すことを実感的に理解したとき、生徒の歴史認識は深まる。このことは、教科書の内容理解に傾斜した知識注入型授業からは得ることはできないと考える。

原田(2000)は、「歴史は史観と理論、注入と探究のいずれかによっても認識可能であるが、開かれた科学的な歴史認識を保証するのは理論の探究だといえよう<sup>3)</sup>」と提唱している。筆者は、ここで言う「理論」を、史観に偏ることなく、対象の事実に即して解釈すること、すなわち、「体験」と捉える。加えて、「探究」とは、「問題解決的な学習や課題追究的な学習」として捉える。これからの社会は、価値観の多様化が進む。このような社会の中で、注入ではなく、探究により歴史認識を獲得していく生徒の姿が求められる。したがって、地域の歴史教材を活用し、体験や探究を単元に位置付けることで、生徒が生活する地域の人々の歩みを、事実や経験に即した解釈に基づき理解することができ、歴史認識が更に深まると考える。また、体験や探究といった学びを、歴史学習の導入である原始時代、つまり、縄文・弥生時代で行うことにより、歴史そのものを学ぶ意義やおもしろさを生徒に実感させ、歴史学習に興味をもって臨むこともねらう。もちろん、社会科学習は、「教え(教授行為)」抜きには成立し得ない。「教え(注入)」か「学び(体験や探究)」か、と二者択一を図るのではなく、「教え」と「学び」の関係にも着目しながら、探究と体験を通して、歴史認識を培う「学び」の在り方について具体的に検討することを本稿の主眼に置き、実践を試みた。

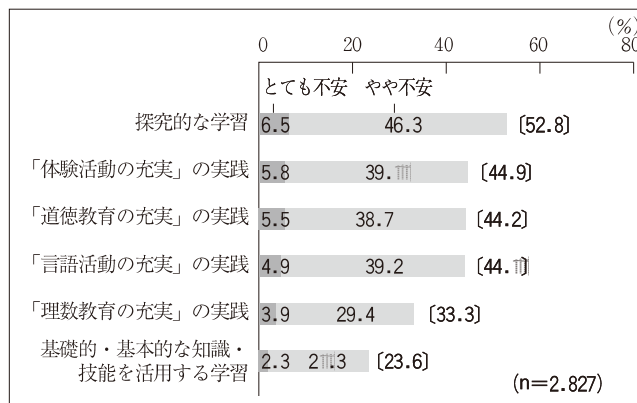


図1 新学習指導要領の内容への不安

\* 上越市立春日中学校

## 2 研究の目的

地域における体験的な活動と推論をはたらかせながら地域の歴史的事象を検証する探究活動を中学校社会科歴史的分野、縄文・弥生時代の単元に位置付けることで、生徒の歴史認識が深まることを明らかにする。

なお、体験的な活動とは、①「なすことにより学ぶ」という直接または疑似体験と、②「見学活動」という間接体験の2つの側面を示す。また、探究活動とは、問題解決的な学習や課題追究的な学習と定義し、研究を進めることとする。

## 3 研究および検証の方法と手立て

### (1) 研究の方法・手立て

本研究において、教材や題材の観点と学習過程の観点から、以下の手立てや指導の工夫を行う。

#### ① 地域における歴史教材の活用と単元構成、時数運用の工夫

総合的な学習の時間を運用することで、縄文・弥生時代における身近な地域の「謎」について、教材化をはかり提示する。また、単元の流れや評価規準をガイダンスを通して生徒に示すことで、学習への意欲を高める工夫を行う。

#### ② 直接、疑似、間接体験などの活動の場の設定

竪穴住居製作体験、火起こし体験、遺跡や歴史博物館の見学体験を行い、縄文・弥生時代の人々の生活を実感的に理解するとともに、先人への畏敬の念をもつことができるようにする。

#### ③ 推論をはたらかせながら、課題を追究したり、意見交換したりする活動の場の設定

「なぜ、上越地域のムラは縄文期に減少したのか」、「縄文・弥生人は上越のどこで生活したか」、「弥生時代の上越の人口は何人いたか」などといった課題を設定し、生徒同士や歴史専門家と意見交換しながら結論を導き出す。

#### ④ 体験、探究の成果を表現する活動の設定

学び（体験や探究）の成果を、「縄文・弥生検定」として自分の言葉でまとめ、仲間や保護者に表現する活動を位置付ける。

### (2) 検証方法

以下の観点から、生徒の歴史認識の変容を測ることで、手立てや単元の有効性を検証する。

- 単元前、単元後のイメージマップ      ○ワークシート等の記述      ○体験や探究時の生徒の様子（観察法）
- 単元のまとめとしての「縄文・弥生検定」      ○アンケート

## 4 研究の実際

### (1) 単元名 『原始時代探訪 ―縄文・弥生時代の「謎」を推理する―』

### (2) 単元の目標

身近な地域において、原始（縄文時代、弥生時代）の暮らしや生活の様子を体験したり、仲間と推論をはたらかせながら、課題を追究し結論を導き出したりして、歴史を築いてきた先人の知恵や生きる力を実感をもって理解し、歴史認識を深めることができる。

### (3) 生徒の現状・実態

歴史学習導入時に行った「もっとも関心がある時代」の問いに対して、(図2)のような結果を得た。縄文・弥生時代に関心がある生徒は、皆無であるといってもよい。その要因として、この時代に関する知識や情報が、他の時代と比較して圧倒的に少ないこと、為政者や歴史上の人物が登場せず印象に残らないこと、原始的な生活に対しイメージがもてないこと、などを生徒は口にした。しかし、生徒のまわりには、この時代の遺跡や関連施設が多くあり、様々な体験を行うことで、興味・関心を高めることができる。また、歴史上の人物が登場しない時代であるということは、換言すれば、当時の民衆の生活や営みに着目させることが可能になるということである。このことから、人々の営みが歴史を作ってきたことを実感させ、歴史認識を深めることにつなげたい。

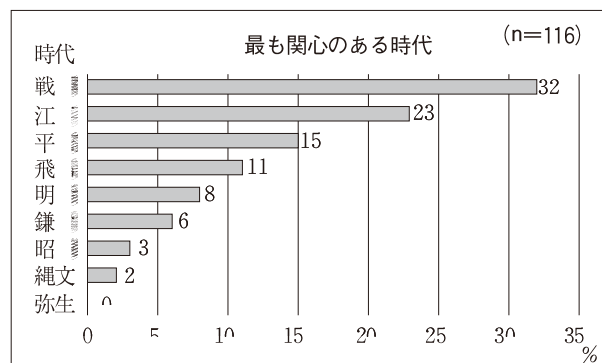


図2 事前調査による各時代への関心

(4) 指導計画 〈社会科 8 時間, 総合的な学習の時間 (8) 時間, 全16時間, その他夏休みや放課後の活動〉

時	題材名 (①~⑧) / 主な学習活動 (・)	手立て (○) / 評価 (※)
1	①「原始時代探訪」学習の見通しをもとう (ガイダンス) 〈社会科〉 ・単元の目標や学習の流れを確認し, イメージマップを作成する。	○各時代の長さを紐を用い, 実感させたり, イメージマップや原始人の顔をイラストで描いたりして, 既有的知識を認識させる。
1	②あなたの顔は縄文系? 弥生系? 〈社会科〉 ・1年を1mmとし, 縄文時代とその他の時代の長さを紐で比較する。 ・資料から, 縄文人と弥生人の顔の特徴をイメージし描いた後, なぜ骨格が変わってきたのかなど, 縄文人と弥生人の相違点を話し合う。	※作業や話し合いに意欲的に取り組み, 縄文・弥生時代の人々の生活の様子を具体的にイメージすることができる。
(5)	③縄文人の世界を知ろう 〈総合的な学習の時間〉 ・火起こし体験や県立長岡歴史博物館見学, 藤橋遺跡調査を行う。 ・段ボール, 割り箸を用い, ジオラマ堅穴住居づくりを行う。	○火起こし体験や博物館見学, 遺跡調査などを行い, 本物に触れる活動を位置付ける。 ※体験などを通し, 原始の人々の知恵や生きる力について実感することができる。
夏/放	④堅穴住居をつくろう 〈放課後・夏休み〉	○推論をはたらかせながら, 意見交換を行う場を位置付ける。 ※原始の人々の生きる力を理解し, 自らの歴史認識を深めている。
2	⑤探究活動「縄文期のムラはどこにつくられた?」〈社会科〉 ・縄文時代の上越の様子やムラをつくるとしたらどこにつくられるか討論し, ムラの形成条件について考える。	○弥生時代の謎について, 専門家の話を聞いたり, 意見交換したりする場を位置付ける。 ※弥生時代の人々の生活に興味・関心をもち, 課題追究活動に意欲的に取り組み, 歴史認識を深めることができる。
(3)	⑥埋蔵文化センターで弥生時代を知ろう 〈総合的な学習の時間〉 ・埋蔵文化センターを訪問し上越の遺跡や土器などの特徴を調べる。	○学びの成果を縄文・弥生検定として表現する場を位置付ける。 ※学びの成果を適切に表現することができる。
3	⑦探究活動「弥生時代の謎を推理しよう」〈社会科〉 ・「弥生時代は上越地域のどこにムラを形成したのか?」, 「なぜ高地や山間部に集落がつくられたのか?」について専門家や仲間と意見交換する。 ・「なぜ稲作が弥生人の団結を強めたのか?」について探究する。 ・「弥生人が最もおそれたことは何か?」について意見交換する。	
1	⑧縄文・弥生検定をつくろう 〈社会科〉 ・学びの成果を「縄文・弥生検定」としてまとめる。	

(5) 学びの実際

本実践は, 平成22年の7月に行った実践であり, 時数の確保という観点から, 総合的な学習の時間との関連を図ることとした。

① 「原始時代探訪」学習の見通しをもとう 一既有知識の整理一  
単元の導入では, 目標・評価規準・学習内容を事前に確認し, 活動への見通しをもった。次に, 「縄文時代」をキーワードにイメージマップを作成した。衣・食・住とその他の観点から自由に記述した。生徒の記述を見ると, 縄文土器や石器, 堅穴住居, マンモス, 狩りなどの記述が圧倒的に多く, それらの知識や情報は, 小学校社会科学習により獲得されたものであった。その後, グループごとに, 各自のイメージマップの内容を発表し合い, 情報の共有化を図った。

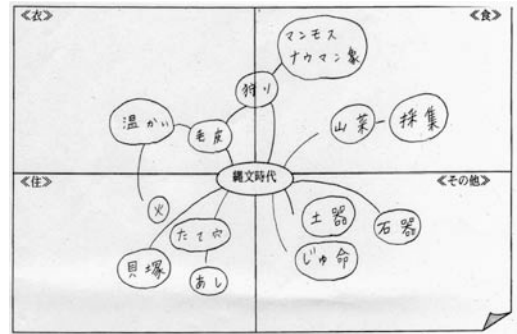


図3 生徒のイメージマップ (例)

② あなたの顔は縄文系? 弥生系? 一事実認識の獲得からより具体的なイメージへ

縄文時代から昭和までの時代の流れをカードで並び替える活動を行った。「どの時代がもっとも長く続いた時代か」という教師の問いに対し, 「江戸時代」「平安時代」という答えが多くあった。次に, 「1年を1mmとしたら, 弥生時代から現在までと縄文時代はどれくらいの長さになるか」という課題について, 資料集の年表から調べる活動を行った。弥生時代から現在までが約2m, 縄文時代が13mとなり, 実際に紐で比較すると, 縄文期の長さに驚きの声があがった。そして, 教師から縄文期は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つの時代に分けられることの説明を受けた。

次に, 縄文人と弥生人の顔の特徴を示す下の資料が提示され, 各自が実際にイラストにする活動を行った。

- |   |
|---|
| <p>〈縄文人の顔の特徴〉 ○眉毛は濃い ○目は大きく二重まぶた ○目の角は明瞭<br/>○鼻はやや広い ○耳たぶ大きくやや垂れ気味 ○両あごがはる ○顔はやや四角形</p> <p>〈弥生人の顔の特徴〉 ○眉毛はうすい ○目は細く一重まぶた ○蒙古ヒダあり<br/>○鼻は低いやや長い ○耳たぶの発達が悪い ○唇は薄め ○面長ではおが張り出す</p> |
|---|



図4 生徒のイラスト

左: 縄文人 右: 弥生人

各自が描いたイラストもグループで発表し合い, 「なぜ, 縄文人と弥生人では, 顔の骨格や特徴が異なるのだろうか」をテーマに意見交換を行った。「食べ物が固いものから, そうでないものになった」「海外からの移住者との婚姻により変わった」

「縄文時代は一万年以上あるので、気候も変わり、顔も身体も変わる」などの結論を導き出した。これらの活動を通し、縄文時代の長さ、衣食住といった事実認識を基に、自分なりの解釈でイメージを更に膨らませていく姿が見られた。

③ 縄文人の世界を知ろう ー実感の伴った理解ー

総合的な学習の時間との関連を図り、新潟県立歴史博物館での体験や調査活動を行った。学芸員から、縄文時代の説明を受け、実際に火起こし体験を行った。思うように火が点かず、悪戦苦闘した。その後、縄文時代にムラが形成された藤橋遺跡を見学し、立地条件や竪穴住居のつくりを調査・見学した。こういった直接、間接体験から、下記のように、縄文時代に対し新たな発見をしたり、認識を深めたりしてまとめた生徒が多く見られた。



写真1 (左) 学芸員による説明  
写真2 (右) 実際の火起こし体験  
写真3 藤橋遺跡での調査

【新潟県立歴史博物館でのワークシート】

火起こし体験から、縄文時代は人々が協力し合っていた時代だと感じました。なぜならば、一人で火を起こすことは大変困難だということが分かったからです。火を起こすためには、チームワークよく、火きり杵の回転を止めないようにしなくてはなりません。だから、お互いに声を掛け合ったりチームワークをよくしたりして火を起こしていたんだと思います。

【藤橋遺跡見学のワークシート】

これだけの住居やムラを作るには、多くの人が協力して作ったのだらうと思った。かやを重ねたり、太い木と細い木を必要に応じて使っていたりして縄文人の知恵が詰まった建物だと思った。

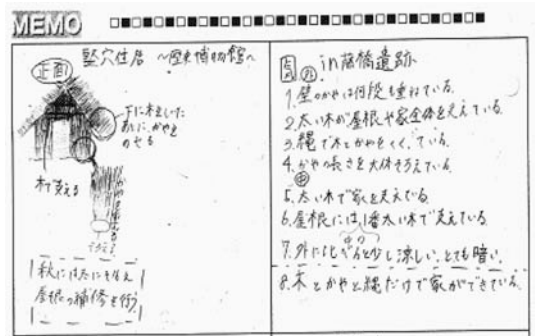


図5 歴史博物館や藤橋遺跡での調査・見学のワークシート

④ 竪穴住居を作ろう ー直接・協働体験と歴史認識の獲得ー

新潟県立歴史博物館や藤橋遺跡での体験や調査を生かし、次に自分たちで竪穴住居を作るための情報や知識を整理した。美術科教師の支援を受けながら、割り箸や段ボールを用い、竪穴住居のジオラマを作成した。そして、学級の仲間と話し合って手順を決め、竪穴住居製作に取りかかった。これらの作業は、放課後や休日、そして、夏休みの時間を利用し、取り組むこととした。話し合った結果、次の手順で作業を進めた。

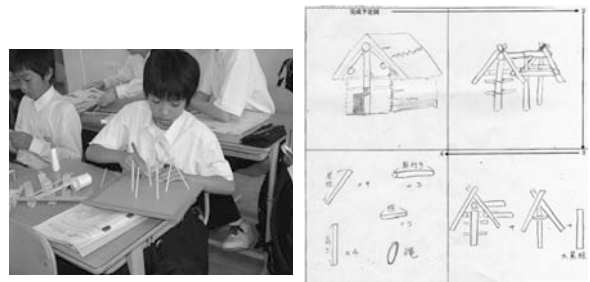


写真4 (左) 竪穴住居のジオラマ作り

図6 (右) 竪穴住居製作のワークシート



写真5 地面を掘り下げ地盤作り



写真6・7 柱を立て、屋根・家の枠組みを作る



写真8・9 周囲の足場を固め、かやを束ねて葺く

この体験は、大変な労力と時間を要したが、仲間との協働体験、自然体験が不足がちな生徒にとって貴重な体験となった。また、竪穴住居の製作という体験を通して、縄文期のムラは争いがなく、複数世帯が共同で生活を送ることの意味を実感を伴いながら理解した。

⑤ 探究活動 縄文期のムラはどこにつくられた？ ーオープンエンド型意見交換と歴史認識の広がりー

「縄文期のムラは上越地域のどこに見られたか」をテーマに意見交換を行った。机に「高田平野全図」を広げ、竪穴住居製作や調査、見学など、既存の知識や情報を活用し、グループで意見をまとめた。その後、各グループでまとめた意見を発表し合った。各グループの主張は、大別すると「狩りや採集に適した山間部(妙高方面、旧東頸方面)」、「河川での漁が行いやすい平地(関川流域の平地)」、「海での漁と山間部での狩りや採集が行いやすいところ(名立・能生

方面)」の3つに分けられた。どの主張の根拠にも説得力があり、認識の広がりや深まりが見られた。

そして、実際に縄文早期から前期にかけての上越地域の遺跡分布(資料1)が示された。実際の遺跡分布を確認し、自分たちの推論に自信をもった。その後、縄文中期の上越地域の遺跡分布(資料2)が示された。2つの資料を比べ、気付いたことや考えたことを発表し合った。

「遺跡の数が増えた」、「平地に増えた」、「山間部の遺跡が減った」などの意見が見られた。

次に、「なぜ、山間部や丘陵地帯のムラは減少したのだろうか」という課題が提示され、仲間と意見交換した。「海の近くの方が食料の確保ができる」、「平野部の方が生活しやすい」、「山間部は雪が多く、少ない平野部に移住した」、「争いが起こり消滅した」などの意見が出された。ある生徒は、地域資料から、この時期に妙高山の噴火が続いていたことと、県立歴史博物館で、縄文人は自然に感謝し、共存しながら生活していたことを関連付け、「噴火や地震を恐れ移住した」という意見を発表した。どの推論も正当性があり、歴史を様々な視点から捉え、複数の事実や事象が存在することを認識した。

#### ⑥ 埋蔵文化センターで弥生時代を知ろう ー地域素材、施設の活用ー

長く続いた縄文期から弥生時代へと時代が進むと、上越地域のムラはどのように変わっていくのだろうか、という疑問が生まれた。そこで、総合的な学習の時間と関連を図り、上越市埋蔵文化センターに訪問し、弥生時代の上越地域の様子について説明を受けた。裏山遺跡や吹上遺跡、斐太遺跡などの分布の特徴やそこから出土された土器、装飾品などについて説明を受けた。弥生時代に入り、遠方との文化の交流があったこと、より多くの出土品があったことなどを知った。地域にある施設を訪れ、実際に出土品を目にし、触れることで、より一層、弥生時代への関心を高めた。

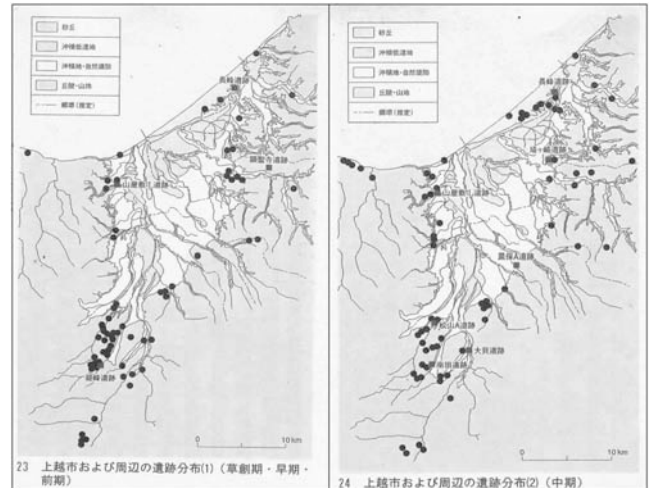
#### ⑦ 探究活動「弥生時代の謎を推理しよう」 ー地域人材の活用ー

ここでは、埋蔵文化センター研究員を招き、「弥生時代のムラは上越地域のどこに見られたか」をテーマに意見交換を行った。縄文期の学習でも、同様のテーマで意見交換をした。これにより、それぞれの時代の歴史認識の違いを明確にすることができた。「争い、争乱が多く起こり、戦いに備え山奥に作った」、「より固い土器を作るには粘土が必要なため、川の近くにムラを作った」、「稲作が栄えたため、平地に作った」、「他地域の交流があるため、海岸沿いに作った」などの意見が見られた。これらの推論に対して、埋蔵文化センター研究員からコメントや推論に対して評価をもらった。そして、教師から(資料3)が提示され「なぜ、この時代は高地や山間部に集落が増えたのか」という課題が与えられた。多くのグループは、「争いや交易のため」という結論を導き出した。また、埋蔵文化センター研究員から、高地性集落や環濠集落の特徴についての説明を聞き、時代背景と集落形成の関連について認識を深めた。さらに、この後も、「なぜ稲作が弥生人の団結を強めたのか」、「弥生人が最もおそれたことは何か」について意見交換を行った。

#### ⑧ 縄文・弥生検定をつくろう ー学びを言語化ー

縄文・弥生時代についての学びの成果を、「縄文・弥生検定」としてまとめる活動では、各自が作成した問題を、それぞれ、上級・中級・初級と3段階に分け、それぞれの問題に自分なりに解釈したことや説明を加えた。これまでに学んだことや体験したことを自分の言葉で表現することで、再度、縄文時代、弥生時代に対する歴史認識を再構築した。

この縄文・弥生検定は、文化祭にて掲示し、保護者や地域の方々にも触れる場を設定した。

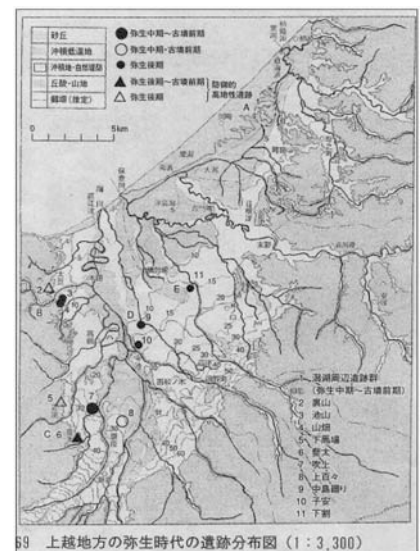


資料1 (左) 縄文早・前期の上越地域の遺跡分布

資料2 (右) 縄文中期の上越地域の遺跡分布



写真10 埋蔵文化センターへの訪問

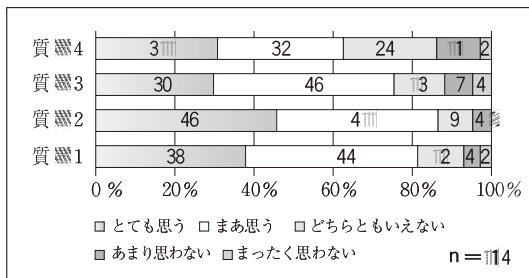


資料3 弥生時代の上越地域の遺跡分布

## 5 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

本実践における手立てと関連させたアンケート結果は以下の通りであり、これらを基に研究の成果について述べる。



質問1：地域における縄文・弥生時代の様子を学ぶことで、意欲をもって活動に臨み、理解が深まった。  
 質問2：竪穴住居作りや歴史博物館見学などの体験を通して、原始の人々の知恵や生活の工夫を実感することができた。  
 質問3：仲間や専門家と縄文・弥生時代の謎について意見交換を行ったことで、自分の考えが広がった。  
 質問4：体験や探究を通して学んだことを、うまく表現できた。

図7 単元終了後のアンケート調査の回答結果と質問内容

#### ① 地域における歴史教材の活用と単元構成、時数運用の工夫

地域の歴史教材を扱った単元を構成したことは、生徒にとって、歴史を身近に感じるとともに、学びそのものに対する関心・意欲の高まりに有効であった。アンケートから、地域との関連は、「意欲的に取り組み理解を深めた（とても思う、まあ思う）」と感じた生徒が82%であった。また、日ごろの授業に受動的な態度で臨んでいた生徒も、地域の遺跡の分布を目を輝かせて調べる姿が見られた。また、入学当初の全国標準診断的学力検査（NRT）では、中領域「縄文時代から古墳時代のような」の正答率は全国比100に対し124であった。翌年の同検査・同項目において、中領域の正答率は132と上昇したことから、本実践の学びが強く印象に残り、学力向上にもつながる手応えを感じた。

#### ② 直接、疑似、間接体験など活動の場の設定

様々な体験の場を位置付けたことが、生徒の歴史認識の深まりに効果があった。（図8）は、単元前後のある生徒のイメージマップの比較である。縄文時代に対する歴史認識が広がり深まっているのが分かる。また、アンケートでは、86%の生徒が、体験を通して先人の知恵を実感することができた、と回答した。これらの要因は、総合的な学習の時間と関連を図り、体験の場を多く位置付けたことや博物館

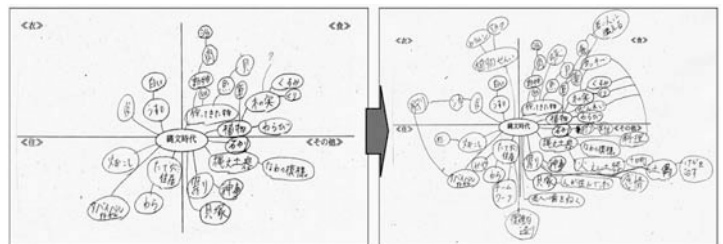


図8 単元前と単元終了後のイメージマップ

の学芸員や研究員との打合せを事前に行ったことにある。本物に出会うことで、実感のともなった学びとなった。

#### ③ 推論をはたらかせながら、課題を追究したり、意見交換したりする活動の場の設定

他者と意見交換する場を設定したことは、自らの歴史的事象に対する認識を見つめ直したり、再構築したりすることができ、有効な手立てとなった。とりわけ、推論をはたらかせ、課題を解決するために行った意見交換では、より明確な根拠が求められ、他者の意見と自分の意見を比較し、検討する姿が見られた。これら、一連の探究活動から、「自分の考えが広がった」とアンケートで回答した生徒は76%となった。「なぜ」、「どうして」という問いは、生徒の主体的な探究につながり、歴史認識の深まりを保障するものであると言える。

### (2) 今後の課題

本実践における課題は、手立てに設定した「体験、探究の成果を表現する活動の設定」である。アンケートからも、学びの成果を思うように表現できなかった生徒が14%いた。今後、様々な場面で、自分の考えをまとめたり、表現したりする活動を計画的に位置付けていくことが求められる。その際、他者を意識した表現の在り方や内容をまとめる視点を効果的に与えていく工夫を行う。そして、生徒が学びの成果を広く仲間や家庭だけでなく、地域に発信、提言していくことができる活動を実践していくことで、社会参画していこうとする態度を高めたい。

## 引用文献および参考資料

- 1) Benesse教育研究開発センター 「第5回学習指導基本調査報告書（小学校・中学校版）」 2011年 p.108
  - 2) 中村 哲 「歴史はどう教えられているか 教科書の国際比較から」 日本放送出版協会 1995年 p.6
  - 3) 原田智仁 「社会科重要用語300の基礎知識 森分孝治 片山宗二（編集）」 明治図書 2000年 p.237
- 資料1・2・3 「上越市史 通史編1 自然・原始・古代」 2004年 p.232, p.307